

# 中国敦煌における不空縹索観音像に関する研究

中村夏葉

美学美術史学専門 前期課程2年

## はじめに

中国北西部の甘粛省敦煌市は、かつてシルクロードの分岐点として栄えたオアシス都市である。敦煌周辺には莫高窟をはじめ、西千仏洞・東千仏洞・榆林窟などの石窟が点在し、これらの石窟群には多くの仏教壁画が残されている。その壁画の主題は時代によっても異なり多岐わたる。

筆者は唐代の敦煌地方における密教の受容形態を明らかにするというテーマのもと、多臂観音に注目し、中でも不空縹索観音像を中心に考察している。敦煌の不空縹索観音像については若干の先行研究があるが、情報に異同がみられる。また不空縹索観音像の作例は、中唐（8世紀後半）から西夏（13世紀初）にかけておよそ70例報告されているが、図版として公開されている作例が非常に少ない。そこで今回の調査では、中・晩唐期の不空縹索観音像を中心に、先行研究を参考にして基本データの確認作業及び新たなデータ収集を行った。

## 1. 調査実施窟

中唐： 莫高窟 第117窟，第129窟，第176窟，  
第200窟，第238窟，第231窟，  
第358窟，第361窟，第384窟，  
第386窟

西千仏洞 第18窟

晩唐： 莫高窟 第19窟，第20窟，第54窟，第  
138窟，第141窟，第145窟，第  
147窟，第156窟，第160窟，第  
163窟，第192窟，第232窟

上記の分類は、不空縹索観音をはじめとする変化観音（千手千眼観音・如意輪観音など）の制作年代を示しており、石窟の造営年代ではない。また後述するが、敦煌の不空縹索観音像は如意輪観音などの他の観音像と共に描かれる傾向がみられるため、不空縹索観音以外の観音像についても若干調査を行った。そのた

め上記の石窟には不空縹索観音が描かれていない窟も含まれている。

（以下文中においては石窟番号のみ示し、西千仏洞は「西」と略す。）

## 2. 不空縹索観音の図像

### a. 中唐期の作例

まず中唐期の作例は9例報告されており、今回はその内8例を調査することができた（第117・129・200・358・361・384・386窟及び西第18窟）。

これらの図像は全て蓮花座上に結跏趺坐し、宝冠には坐像の化仏を有している。頭数は全て一面である。不空縹索観音の特徴として経典にしばしば説かれる第三眼は、第386窟が不明であるのを除き他は全て表わさない。またもう一つの特徴と思われる鹿皮は、左肩から左第一手の腕全体を斑点文様の布状のもので覆うことで表現されている。これは全ての作例においてみられた。臂数は六臂（第117・384・386・西18窟）と八臂（第129・200・358・361窟）が認められる。

印相・持物は、六臂・八臂像共に左右第一手は胸前で人差し指と親指で輪をつくり、他の三指を立てる安慰印を結ぶか、又はその安慰印の人差し指と親指で蓮華の茎を持つのが基本形となっている。その他、第384窟では同様の形で右手に柳枝、左手に蓮華を持ち、第117窟では左手に蓮華を持ち、右手は施無畏印をとる例もみられる。

第二手は、縹索と水瓶を左右のどちらかに持つ傾向がみられる。これは8例中5例が該当する。その他は右手柳枝・左手水瓶（第200窟）、右手水瓶・左手垂下（第361窟）、右手垂下・左手不明（第386窟）となっている。ただし、手を垂下する場合については、その形状が縹索を持つ際の形状と非常に似通っているため、本来は縹索を持っていた可能性も考えられる。

第三手は六臂像の場合、左右共に三叉戟を持つ例（第386・西18窟）、右手に三叉戟・左手に壺を持つ例（第117窟）、右手に鉞戟・左手に壺を持つ例（第384

窟)がある。八臂像の場合は、右手に柳枝または水瓶を執り、左手に壺や水瓶または数珠を執るなど規則性がみられない。

八臂像の第四手は、左右共に三叉戟(第358窟)、右手錫杖・左手三叉戟(第361窟)、右手鉞戟・左手壺(第129窟)、右手宝印・左手華瓶(第200窟)という組み合わせがある。

以上のことから六臂像・八臂像ともに第一手・第二手に関しては一定の印相や持物を執ることがわかる。また六臂像の第三手と八臂像の第四手の持物が比較的同じ傾向を示している。それは六臂第三手と八臂第四手が肘を曲げて持物を上方に掲げるという同様の形をとるためであると考えられる。すなわち印相・持物の観点からすると不空罽索観音の図像ベースは六臂像であると考えられる。八臂像は、六臂像の第二手と第三手の間に一手を加えることで先に述べた八臂第三手が成っている。

## b. 晩唐期の作例

次に晩唐期の20例中、今回は10例を調査した(第19・20・141・145・147・156・160・163・192・232窟)。

晩唐期の作例は基本的には中唐期の図像を踏襲している。坐勢は同じく蓮華座上に結跏趺坐し、頭数は一面である。しかし細部においては多少の変化が見られ、宝冠に化仏がない例(第160窟)や第三眼を表わす例(第19・20窟)が認められる。その他、鹿皮は全ての作例において着けており、臂数は六臂が4例(第145・147・192・232窟)、八臂が6例(第19・20・141・156・160・163窟)確認された。

印相・持物は、まず第一手は第19窟の右手に安慰印を結び左手に火炎宝珠を持つ以外は、全てが胸前の安慰印状の手に蓮華を持つ形をとる。第156窟の例では左第一手に蓮華を持つが、その蓮華上に火炎三弁宝珠を表わしており、第19窟の火炎宝珠と共に中唐期には見られなかった宝珠が新たな要素として加わっている。

第二手は、中唐期にみられた水瓶と罽索の組み合わせの他に、水瓶と水瓶(第141・192窟)、罽索と数珠(第145・147窟)という組み合わせがみられる。

六臂像第三手は、中唐期に見られた左右共に三叉戟を執る例がないものの、左右に鉞戟を執る作例がみられる(第147・192窟)。三叉戟と鉞戟は多少形状が異なるが、戟ということでは同類のものであるため、この左右に鉞戟を執る形も中唐期の三叉戟の延長上にあ

ると考えられる。その他には右手三叉戟・左手水瓶(第145窟)、右手三叉戟・左手壺(第232窟)を執る例がある。八臂像の場合は、右手に宝印を執る例が1例(第141窟)、柳枝を執る例が2例(第160・163窟)ある他、掌を上方に向け人差し指と親指で輪をつくる形で無持物であるのが3例(第19・20・156窟)ある。この3例の手の形は柳枝を執る際の手の形と同じである。左手は、掌を上方に向けその上に壺を載せる例が3例(第20・141・163窟)あり、無持物で掌を上に向けて水平に保つ例が2例(第19・156窟)みられる。その他、第160窟の作例は左手第三手に龍索を持っているほか、左手第四手には宝輪を持っているなど、かなり特異な図像を示している。

第四手は、中唐期と同様に左右どちらかに錫杖または三叉戟を執る形式がみられる(第19・20・141)。また左右共に三叉戟を執る例(第163窟)もあり、第四手は比較的持物の異同が少ない。

このように不空罽索観音の持物は様々であり、そこに多少の規則性を見出すこともできるが、今回調査した中では、持物が同一パターンである作例は一例も見当たらず、ほぼ持物が一定で図像が安定している如意輪観音とは対照的な結果となった。

## 3. 脇侍像

敦煌の不空罽索観音像の多くは、周囲を供養菩薩や天王、忿怒尊などが取り囲む法会形式で表わされる。(図1)これは如意輪観音像や千手千眼観音像についても同様である。脇侍像の数については、画面の余白の大小や有無によってかなり差がみられる。脇侍像は①菩薩、②天王、③忿怒尊、④毘那夜迦、⑤婆薮仙、⑥功德天、⑦龍王、⑧日・月、⑨飛天に大別できる。①菩薩像については尊名が不明な像が多いが、持物の特徴からいわゆる金剛界三十七尊中の内外四供養菩薩が含まれている可能性があり、名前が不明な図像と共に更に検討が必要である。

この他の脇侍像として、第232窟(晩唐)では亀の獣座に座る菩薩形の図像がみられる。この図像は、中唐の第231窟千手千眼観音及び第358窟如意輪観音の脇侍にも認められる。(図2-1)亀に乗る尊像としては水天像が想起され、莫高窟においては盛唐末期とされる第148窟に明らかに水天像であると認められる2例がある。その図像は左手に剣を、右手に龍索を持ち亀の上に結跏趺坐している。また1例は頭部に龍蓋を着けている。改めて第232窟の例をみると、持物

敦煌の不空羅索観音像一覽 (2007年9月調査分)

窟番号	時代	姿勢	化仏	三眼	獸皮	頭数	臂数	右4手	右3手	右2手	右1手	左1手	左2手	左3手	左4手	対尊像
117	中唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	6		三叉戟	絹索	施無畏印	蓮華	水瓶	壺		如意輪
129	中唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	8	鉞戟	柳枝	絹索	安慰印	安慰印	水瓶	数珠	壺	如意輪
200	中唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	8	宝印	柳枝	水瓶	蓮華	蓮華	絹索	三鈷杵か	華瓶	如意輪
358	中唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	8	三叉戟	水瓶	柳枝	青蓮華	蓮華	軍持	壺	三叉戟	如意輪
361	中唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	8	錫杖	不明	水瓶	蓮華	青蓮華	垂下 (持物不明)	華瓶	三叉戟	不明
384	中唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	6		鉞戟	絹索	柳枝	未敷蓮華	水瓶	壺		如意輪
386	中唐	結跏趺坐	坐像	不明	○	1	6		三叉戟	垂下	安慰印	不明	不明	三叉戟		如意輪
西18	中唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	6		三叉戟	水瓶	器物 + 蓮華	未敷蓮華	絹索	三叉戟		不明
19	晚唐	結跏趺坐	坐像	○	○	1	8	錫杖	第1・2指を捻ず	水瓶	安慰印	火炎宝珠	垂下	水平 (持物不明)	三叉戟	如意輪
20	晚唐	結跏趺坐	坐像	○	○	1	8	錫杖	第1・2指を捻ず	水瓶	蓮華	蓮華	垂下	壺	三叉戟	如意輪
141	晚唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	8	三叉戟	宝印	水瓶	蓮華	蓮華	水瓶	壺	錫杖	×
145	晚唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	6		三叉戟	数珠	蓮華	蓮華	絹索	水瓶		如意輪
147	晚唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	6		鉞戟	絹索	未敷蓮華	未敷蓮華	数珠	鉞戟		如意輪
156	晚唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	8	宝印	第1・2指を捻ず	水瓶	蓮華	三弁宝珠 + 蓮華	垂下	水平	華瓶	如意輪
160	晚唐	結跏趺坐	×	×	○	1	8	三叉戟	柳枝	水瓶	蓮華	蓮華	垂下	索	宝輪	×
163	晚唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	8	三叉戟	柳枝	垂下	蓮華	蓮華	不明	壺	三叉戟	十一面六臂觀音
192	晚唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	6		鉞戟	水瓶	蓮華	蓮華	水瓶	鉞戟		如意輪
232	晚唐	結跏趺坐	坐像	×	○	1	6		三叉戟	水瓶	蓮華	蓮華	絹索	壺		如意輪



図1 不空縹索観音像 第14窟(晩唐)



図3 石窟平面図の一例



図2 如意輪観音像 第358窟(中唐)



図2-2



図2-1

は左手に蓮華を執るのみで龍蓋もみられない。第231・358窟の例にいたっては持物が一切ない。筆者の管見の限りではこの様な水天像の作例を他に確認することができない。そのためこの図像を水天像の一形態とするのか、或いは他の尊像とするべきか今後の課題としたい。

更にもう一点留意したい図像として、観音像の頭上と天蓋との間にできた空間に両脇に比丘を一体ずつ従えた仏坐像が挙げられる。今回の調査では第358窟(中唐)の不空罽索観音像と如意輪観音像にみられた。(図2-2)これは以前調査した第14窟(晩唐)の不空罽索観音像と如意輪観音像にも同様に表わされていた。観音像と組み合わせられたこのような図像は他に類例をみないため今後更に検討したいと思う。

#### 4. 石窟内における配置

先行研究においても既に指摘されているように敦煌の不空罽索観音は大多数が如意輪観音と対となる配置で描かれている。今回調査した18例の中でも13例が該当する。2例不明な例があるが、それらも石窟内の配置関係から如意輪観音が描かれていた可能性が高い。両観音は石窟主室の東壁の入り口を挟む両側に描かれることが多く、甬道(入り口通路)の両側壁に描かれる例もある。この他、石窟本尊を安置する西壁龕内の天井部に描かれる例もあるが、やはり入り口付近

に描かれることが圧倒的に多い。(図3)石窟内の壁画の構成において、本尊を安置するために龕が穿たれている西壁を除くと、壁画を描く場所として最も主要な壁面は南北壁であり、この東壁という位置は二次的な場所と言える。このことから不空罽索観音はその石窟構成の根幹をなす存在ではなく、あるテーマのもとに副次的に付加された存在ではないかと考えられる。南北壁には主に阿弥陀経変や薬師経変、弥勒経変、華嚴経変、報恩経変、法華経変などといった様々な仏国土における説法図が描かれる。すなわち敦煌においては、不空罽索観音をこれらの阿弥陀浄土に限らない広義の浄土図と組み合わせることが重要であると考えられたのではないだろうか。この点については、変化観音經典に説かれる浄土往生思想に関連している可能性があり、今後詳しく考察する予定である。

付記：今回の調査は宮治昭先生及び敦煌研究院の李萍さんのご協力により実現した。また現地では東海学園大学の渡邊里志先生にもご指導いただいた。ここに深く感謝の意を表す。

#### 主要参考文献

- 敦煌研究院編『敦煌石窟内容総録』文物出版社 1996年12月。  
 林亨國「中国の変化観音について」『シルクロード学研究』11  
 シルクロード学研究センター 2001年3月, 89-16頁。  
 彭金章「敦煌石窟不空罽索観音経変研究——敦煌密教経変研究  
 之五」『敦煌研究』1999年, 第1期, 1-24頁。  
 彭金章 主編『敦煌石窟全集 10 密教画卷』上海人民出版社  
 2003年12月。